

F・ナイトの「懐疑性・多元性および自由主義」―批判者としてのナイト

周防健翔（大阪大学・院）

1. はじめに

本報告の目的は、フランク・ナイト（Frank Hyneman Knight, 1885-1972）の思想における「懐疑性・多元性および自由主義」を、マイケル・ポランニー（Michael Polanyi, 1891-1976）との比較を交えて検討することである。ナイトは、「自由放任の擁護（者）」（Kasper 1993, 413）といわれる一方、「嫌々ながらの『自由主義者』」（Boyd 1997, xiii）とも評されるなど多様に解釈され、「アンビバレント」（佐藤 2014, 210）な思想家と目されている。こうした解釈の難しさが、ナイトの懐疑性と多元性に由来するのではないかという問題意識のもと、本報告ではそれらを再考し、その視角から自由主義を検討する。

くわえて、ナイトの方法論は批判的である。「私は独自の創意というものを否認する」（Knight 1933, xxii）と述べるように、自らの新説を体系的に論じるのではなく、既存の考えを批判し、その隠れた問題点を明らかにするというのがナイトの基本的な態度であることを鑑みると、批判者としてのナイトが、いったい誰のどのような点を批判したのかを検討することは、ナイトをより深く理解するうえで有益であろう。ナイトの批判の矛先は、ヴェブレン、ケインズ、ハイエク、デューイ等、多様な人物・思想に向けられてきたが、本報告では、「批判者としてのナイト」研究の一環として、ナイトによるポランニー批判を検討する¹。本論に移る前に、簡単にポランニーを紹介する。ポランニーは、ハンガリーのユダヤ教家族に生まれた5番目の子供で、兄には著名な経済人類学者のカールがいる。ポランニーは、のちにカトリックの洗礼を受けるが、世俗の結婚式を挙げ、その後プロテスタントを支持するという「落ち着きのない」人物である。それは学問遍歴においても表れており、彼の研究は医学から始まり、物理化学、経済学、哲学、神学、美学へと移っていった。ポランニーは、物理化学においては「ノーベル賞に値する」（慶伊 1987, 25）といわれるほどの業績を残しながら社会科学へ転向し、哲学の分野でも「暗黙知」として知られる知識論・実在論を提唱したことでその名を広く知られている。ナイトと直接どのような交流があったかは調査中であるが、ポランニーはハイエクの招待により、「モンペルラン・ソサエティ」にその第一回会議（1947）から参加しており、またナイトが中心となって設立した「シカゴ大学社会思想委員会」にも所属し、シカゴ大学にて講義を行うなど、ナイトと交流があったこと自体は確かだと思われる²。

2. 先行研究

「ナイトとポランニー」に関する先行研究としては、まず Buchanan（1967）がある。

¹ 『徳と知識』（1949）において多岐にわたるポランニー批判が展開される。

² ポランニー紹介については、Scott and Moleski（2005）を参照。

Buchanan (1967, 303-305) は、ナイトとポランニーはともに、「良き社会」のための社会組織における自生的な共同作用の過程を重視している点では共通しており、自由主義においても個人的自由を擁護する古典的自由主義を共有していると論じる。しかし、科学と政治における自由の正当性および真理観には重要な差異があると指摘し、そしてそこから導かれる政治の役割に着目する。すなわち、絶対的な真理の存在を想定し、政治の役割を社会における真理の発見とみなし、自由をそのための効率的手段ととらえるポランニーに対し、絶対的真理という観念を否定し、政治の役割を多様な利害を折衷するプロセスととらえ、自由はそれ自体として価値をもつと考えるナイト、という構図である。ブキャナンがこのような理解に対し批判を加えたのが Roberts (1969, 236-239) である。ロバーツによれば、ポランニーは自由それ自体にも価値を認めており、絶対的真理の存在という想定は相対主義に陥ることを防ぐための論理的に必要とされる措置でもあり、真理や価値を相対的とみなすブキャナンは自由主義を擁護するいかなる根拠をもつことができないとされる。その他の研究としては、Emmett (1999, xxii) の指摘が示唆的である。エメットは、自身が編纂したナイトの論文集の序文において、基本的にはブキャナンと共通の認識に立ちつつ、くわえて両者の差異が、科学的共同体の社会への貢献の仕方にかんする認識にあると論じる。すなわち、社会は科学や科学的知識の権威を受け入れるべきだとするポランニーに対し、ナイトは、科学的共同体の貢献はその権威や知識ではなく、討議の形式にあると主張するのである。エメットは、ナイトとポランニーの自由主義理解にも着目するが、ブキャナンと同様に両者の自由主義は類似していると指摘することとどまり、具体的な検討には踏み込んでいない。しかし、類似したものに思われる両者の自由主義を検討することは、ナイトだけでなくポランニーの自由主義を理解するためにも重要である。

3. 懐疑性・多元性

(1) 懐疑性

『徳と知識』において、ナイトが最も驚嘆したことは、「ポランニーが、伝統の大多数を認識・承認し、そして『我々の各自は無批判に特定の種類の多く（の伝統）を受け入れることによって彼（自身）の知的発展を始めなければならない』ことを是認すること」であった。ポランニーにおける科学的伝統とは、科学的研究に必要なさまざまな知識や技法に加え、真理は存在し、共同社会のすべての成員がそれを愛し、また追求する義務を負っていると感じて、実際そうすることができる、という信念を体現すると同時に、自らの良心にもとづき公正で寛容な討議を行わなければならないという精神的な規範を意味する（ポランニー 1946, 訳 130-137）。こうした伝統は、社会においては「真理・正義・愛・寛容の実在性への信念」を体現するものと想定され、そうした「超越的な基盤」に献身することが、社会の相互調和と自由の基礎なのである（ポランニー 1988, 訳 58-59）。こうしたポランニーの不批判的態度、ないし「アンチ合理主義リベラリズム」（渡辺 2006, 247）の背後には、佐藤（2015, 136）も指摘するように、「道徳的反転」の理論がある。道徳的反転と

は、ラディカルな懐疑主義によって、信じるべき価値や規範、そしてそれを体現する伝統が破壊され、ニヒリズムに陥った人々の道徳的情熱が、厳密に機械的な人間観・社会観が余地を残している唯一の水路、すなわちマルクス主義のような科学的ユートピアに注ぎ込まれる過程を意味する。これこそ全体主義の根源であり、ポランニーが最も恐れていた事態なのである（ポランニー 1988, 訳 133-135）。ポランニーは、決して懐疑を完全に否定するわけではなく、その歴史上の功績を認める。しかし、懐疑主義は、科学的客観主義とともに、20世紀前半のドイツやソ連における全体主義を生み出し、自由社会を崩壊の危機にさらしていた。こうした切迫した危機感が、ポランニーをして「懐疑の時代は終わった」と言わしめたのである（ポランニー 1988, 訳 138）。

ナイトの懐疑性はもちろん、『徳と知識』において、ポランニーの伝統主義的態度を批判する。近代において、「すべての個人は無数の伝統と共同体のなかに生まれる」のであり、「もしどのような範囲の自由も認められるなら、個人が傾きがちでないかなる信念ないし実践も正当化するような伝統的共同体を見つけることができ」、そこには「科学と正反対のドグマや忠誠も存在する」（Knight 1949a, 277）。そうした絶対的なものを懐疑し批判的討議を行うことがナイトの基本姿勢である。しかし、ナイトはあらゆる伝統や信念を懐疑によって破壊してしまうような懐疑主義者ではない。ナイトは、伝統に対して常に懐疑的ではあるが、ポランニーと同様に、自由主義の放縦と全体主義への危機感を強く抱いていた時代には、懐疑よりも信じることの重要性を説いている。

社会的連帯は宗教的「信念」に依存し、科学者ないし批評家のいう信念とは似ているのではなく正反対である。批判されず、批判の上位にあり、質問することが不道德なだけでなく、それらが実際何であるのかを見ようとしたり探求しようとしたりすることも同じく不道德であるような諸信念がなければならない。…合理的、もっともらしい信念、ないし批判的に擁護しうる信念で、この目的にかなうものなどない（Knight 1932, 75）。

ナイトにおいて、知性の働きは「道徳の力」によって平衡が取られなければ「決定的かつ明確に反社会的傾向を有する」のであり、「連帯の基礎は知性にあるのではなく、習慣や情緒や価値の観念」にあると考えられている（Knight 1933, xxxii-xxxiii）。ナイトは、ポランニーが科学における「懐疑的態度」の重要性に言及しない点を批判するが、ナイトもまた信念の重要性を説き、ラディカルな懐疑の危険性を認識している点で、懐疑性はナイトとポランニーを隔てる根本的な差異ではないと考えられる。では、ポランニーへの本質的な批判はどこに向けられたのだろうか。

（2）多元性

ナイトの批判は、ポランニーの絶対的真理観にも向けられる。これはブキャナンも指摘する通り両者の政治観の差異とつながっており、ナイトの主要な批判も、哲学としての真

理観を現実の政治に適用しようとする点に向けられる。ただし、Roberts (1969, 237) が反論するように、ポランニーの真理観は、相対主義に陥ることを防ぐという論理的要請、あるいは真理をプロパガンダのために利用する共産主義に対抗するという目的論的要請が大きく影響しており、実際、ナイトもポランニーの真理観をその「永遠に暫定的な」本性を強調した点で高く評価している。両者の真理観の差異が示唆しているのは、相対主義を回避するために絶対的なものを持ち出すというポランニーの一元的態度に対し、相対主義と絶対主義の双方を受容し、「相対的に絶対的な」価値を追求するというナイトの多元的態度である³。

また、ナイトの主要なポランニー批判は、社会科学の方法論に向けられる。ポランニーは、ナイトが常に批判してきた科学主義者とは異なり、科学も価値判断から自由ではないこと、真理の永遠に暫定的な本性を強調した点で異質であった。しかしナイトによれば、ポランニーは、社会問題は科学的方法によって解決可能であり、また実際に科学の手続きはすでに社会問題を扱う際に使用されていると考えている点で、「過度な単純化」の罠に陥っている (Knight 1949a, 279)。ポランニーは、個人的判断の余地がある点で科学的問題は道德問題と類似していると考えており、それゆえ社会問題も、(ポランニーが想定する)自然科学における真理追求の方法、すなわち共通の伝統に献身し、良心的で自由な討議を通じた「実在」の発見によって解決可能であると考えた。しかし、ナイトにおいて、科学的問題と社会問題の性質は大きく隔たっている。自然科学の問題は、「実験」によって客観性が担保されるだけでなく、問題の解決を保留できる。しかし、社会問題は、「やり直しのきかない方法で、『今』解決されなければならない」問題であり、また人間に関係する事柄は、常に「変化」するため、実験が可能だとしても繰り返すことはできない⁴。さらに、科学的問題の本質は「予測と管理」であり、その帰結は「諸法則」の発見、そして事実に関する分析的で記述的な言説であるが、社会問題は、利害や価値の調停の問題であり、規範や理想への合意を帰結する問題である。二つの問題は「である」(is) に対する「であるべきである」(ought to be) という関係にある。故に、自然科学と社会科学の問題は区別して考えなければならないのである (Knight 1949a, 282)。ナイトは、「知識人につきまとう究極的な罪は過度の単純化である」と考えるが、ポランニーもまた、その罪を犯しているのである (Knight 1949b, 443)。

ナイトは、社会科学の出発点として、「人間の素朴な現実主義」に立つ (Knight 1934, 335)。こうした観点から、ナイトは人間や社会問題の複雑性と多元性を洞察するが、この多元性こそ、ナイトを理解するうえで懐疑性以上に重要な概念だと思われる。懐疑性の検討にお

³ 「相対的に絶対的な」ものを希求する態度は、Knight (1923, 37: 訳 7) や Knight (1946, 397: 訳 214) において明示的に表れている重要な概念である。

⁴ (Knight 1949a, 278)。ポランニーが科学的問題と社会問題を混同することについて、「社会問題をまったく知識の問題として扱う」と批判しており、ナイトには反主知主義的傾向がみられる。ここで反主知主義とは、ソクラテス・プラトン流の、知の獲得が徳や善の実践を可能にし、人間や社会を幸福に導くとする主知主義に反対する立場を意味する。

いて、ナイトもポランニー同様、伝統や信念の重要性を認識していたと論じたが、それにも関わらずナイトがポランニーを批判した理由は、この多元性にある。ナイトにとって、社会問題を扱う際に重要なことは、「道徳性と知性の関係、そして十分な手段の準備を理解すること」であり、これらの関係は補完的なものだ。それゆえ、「良き生活にとって、これら三つの必要条件のうちどのひとつの発展であっても他のふたつと一致して発展する必要がある」(Knight 1941, 182)。ナイトは、こうした多元性を認識していたために、社会問題は、科学主義に代表される知性の偏重や、伝統主義や道徳主義に代表される道徳性の偏重では対処できないと考え、バランスのとれた多元的な態度を要求するのである。こうした観点から、ポランニーに対する伝統主義批判の本質は、社会科学の方法論批判と同様、その一元的態度に向けられていたと解釈すべきだろう。「人間や社会の健全な記述のないし有用な討議の哲学的基礎は、根本的なカテゴリーの複雑で捉え難い多元主義を認識することではなければならない」のである (Knight 1948, 42)。ナイトの多元性は、次節の自由主義の検討においても中心的な概念である。

4. 自由主義

これまで検討してきたナイトとポランニーの思想は、すべて自由主義観と密接に結びついているが、本節では両者の自由の概念および自由社会観を検討する。

ポランニーにおける自由の概念は、佐藤 (2010, 41) も指摘するように、I. バーリンの二つの自由概念を含んでいる。すなわち、外的な制約からの自由としての「私的自由」と非個人的な責務に従う自由としての「公的自由」である。ポランニーは、私的自由はニヒリズムに転化しやすく、公的自由は全体主義に陥りやすいと指摘しながら、科学においてこのジレンマは解消されていると論じる。科学の共同体には、二つの自由概念結びつける自由の第三の機能として「相互調節」が働いているのである (ポランニー 1988, 訳 41-43)。ポランニーはこれらの自由の在り方を、ジグソー・パズルの集団的な取り組みを例示して説明する。すなわち、「各自が自由にふるまってそのイニシアチブを発揮するに任せる」(私的自由) ことで、各自はパズルの進捗に合わせて「最新のアウトラインに応じて自らに新たな課題を設定」(相互調整) し、最大の効率をもって「全員の努力が、緊密に組織された全体を形成する」(ポランニー 1988, 訳 45)。相互調整が機能するか否かは公的自由にかかっており、伝統への献身を強調するポランニーにとって、自由社会における最も重要な自由は、この公的自由なのである。それゆえポランニーにおける自由社会とは、「開かれた社会の事ではなく、ただ、ある際立った種類の諸信念に身をささげた社会」なのである (ポランニー 1988, 訳 ii)。自由な国民の多くは、「良心への呼びかけにいつでも応える態勢」にあり、自発的な相互調節を示し、それぞれの国民が争うことがあったとしても、「同じ超越的な基盤に堅固に根差して解決に達することになるだろう」というのがポランニーの基本的な立場である (ポランニー 1988, 訳 58-59)。

他方、ナイトの自由主義は、ポランニーと同様、「消極的自由」、「積極的自由」の概念を

含むが、佐藤（2014, 210-213）が指摘するように、ナイトの自由の概念は、形式的/実質的自由としてとらえるべきものである。形式的に個人の平等な権利が認められていたとしても、その自由を行使する何らかの力がなければ自由は空虚なものとなる。この点で、ポランニーの理想とする相互調節という自由の第三の機能は、社会問題を解決できない。なぜなら、社会における人々の関係は実質的には不平等であり、強者は恵まれない人に対し片務的な義務を負い、また諸個人の相互調節を超えた一般的な利害が存在するからである。さらに本質的なのは、自由社会における社会問題は、「ゲームの無限の多様性をカバーするルール作り」の問題、すなわち最も広い意味での「正義」の問題だということであり、これは科学におけるような知識の問題ではないとナイトは論じる（Knight 1949a, 281-82）。

さらにナイトは、メンバー全員に共有される理想に定着した良心の共同体は、その理想を体現し、理想の存在を活発に表明するというポランニーの主張に対し、疑問を投げかける。科学に代表されるそうした共同体と、現実社会における「本質的に異なる諸規範、立法、道徳、政治、宗教等々をもった無数の共同体間の限りない差異と対立」、「それらの諸変化や出現と消失」、「目の回る多様性と絶え間ない変化」との対照は何を意味するのか

（Knight 1949a, 276）。ここにもやはり、ナイトの多元性が表れていると思われる。ポランニーが科学の共同体と自由社会を一元論的に類似したものだと考え、同質的な社会を想定するのに対し、ナイトが想定する自由社会は、多様性、変化、対立をはらむより複雑な社会なのである。それゆえ、自由社会の問題は多元的な観点で論じられなければならないと同時に、ナイトにとってそうした多元性を許容する規範こそが自由主義だといえる。

5. 結論

ナイトとポランニーの比較を通じて、その根本的な差異が多元性にあることが明らかとなった。懐疑性もまたナイトの重要な思想であり、ナイトの洞察はまず懐疑することから始まるが、多元性の認識が、ラディカルな懐疑主義へ陥ることを抑制し、ナイトの思想をバランスのとれた、あるいは「アンビバレント」なものにしているのではないだろうか。ポランニーは、放縦や全体主義にさらされた自由社会を立て直すため、絶対的な真理や伝統的信念の信仰を一元的に重視したが、ナイトはその重要性を認めながらも、懐疑的・多元的な認識・方法の必要性を訴えた。こうした思想が、ナイトとポランニーの自由社会観にも及んでおり、K. ポパーの言葉を借りれば、ポランニーが「閉ざされた社会」を理想としたのに対し、ナイトは「開かれた社会」を理想としていたといえるだろう。

本報告では、ナイトの人間観や価値論、経済・政治論には触れられなかったが、これらの思想も同様に、「懐疑性・多元性および自由主義」と密接に関係している。そこで今後の課題として、こうした論点でのポランニーとの比較をはじめ、ナイトの批判が向けられた多くの思想家との比較を試み、より深いナイト理解につなげたい。

（※ 紙面の都合上、参考文献は当日配布致します。）